

UCL 応用統計学科の教育内容と 統計学者ネットワーク: 1911-1933

大阪大学・大学院経済学研究科 竹内 恵行

本報告は、近代統計学の形成に関し、20世紀初頭における K. Pearson と彼が率いた University College London (UCL) の応用統計学科の果たした役割を、資料から解明しようとする試みである。1930年代前半に UCL に留学し、Ph.D.を取得した佐藤良一郎の回顧録(佐藤(1968))によれば、1920年代に日本から UCL の応用統計学科に4名の日本人が留学していたことが確認されている。同様にして、世界中からも統計学者が集まっていたものと考えられる。各国の統計学者たちと K. Pearson との交流については、Guttorp and Lindgren (2009) など、断片的かつ個別の研究があるが、その全体像までは明らかにはなっていないと思われる。また、そこでどのような教育や研究が行われていたかも断片的にしか伝えられていない。

そこで本報告では、UCL の応用統計学科が創設された 1911 年から、それが統計学科と優生学科に分離される 1933 年までの 23 年間における、応用統計学科のスタッフと教育内容の変遷を一次資料から明らかにする。また、同じ資料から、応用統計学科に在籍した大学院生(postgraduate student)と研究生(research student)のリストを作成し、K. Pearson を中心とした統計学者の世界的ネットワークの解明を試みる。

資料を分析した結果、この期間における大学院生および研究生の実数は約 100 名であり、そのうち英国以外からの者が 1/3 を占めること、また日本人留学生は佐藤(1968)の指摘した者の他に 2 名存在したこと、などが明らかとなった。

参考文献

- Guttorp, P. and Lindgren, G. (2009), "Karl Pearson and the Scandinavian School of Statistics," *International Statistical Review*, 77 (1), pp.64--71.
- 佐藤良一郎 (1968) 「数理統計学と五〇年 (3) - (5)」, 『統計』, 1968 年 10 月号 - 12 月号